文藝春秋 文春ムック 特別編集

この一冊で
日本の医療の最前線が
よくわかる

スーパードクターに教わる最新治療2024

2023年11月30日発売に掲載

中原眼科

中原眼科

〒194-0013 東京都町田市原町田6丁目19-14　TEL 042-851-7171
https://www.nakaharaganka.com

Contents
目次

中原眼科

**確かな技術と先進の機器を備えて
患者に寄り添う理想の眼科治療を追求**

中原 将光／中原眼科　院長

白内障・多焦点眼内レンズ ································ 118

**白内障手術のポイントは眼内レンズ選び
多焦点眼内レンズで満足できる視力回復を**

中原 将光／中原眼科　院長

中原眼科

〒194-0013 東京都町田市原町田6丁目19-14
TEL 042-851-7171
https://www.nakaharaganka.com

確かな技術と先進の機器を備えて患者に寄り添う理想の眼科治療を追求

町田市は東京・西部を代表する繁華な都市の一つだ。ここに眼科クリニックを2021年に開業した中原将光医師は、アクセスの良さが選んだ理由の一つという。その言葉通り、同クリニックには全国から数多くの患者が来院しており、多くの患者の期待に応える先進的な眼科治療を行っている。

院長　中原 将光

なかはら・まさみつ／1978年東京都生まれ。2003年浜松医科大学卒業。東京医科歯科大学病院眼科、横浜市立大学附属市民総合医療センターなどを経て、フリーランスの眼科医として手術を中心に活動。2021年4月に中原眼科を開院。日本眼科学会認定専門医。著書に『最高の白内障手術』（幻冬社刊）がある。

理想的な視力を回復できる多焦点眼内レンズを推奨

「眼は人間の臓器の中で最も精緻であり、その手術は最も難しい。だからこそやりがいがあるのです」と話すのは、中原眼科の中原将光医師だ。中原医師は眼科医となってい現在まで3万症例以上の手術を行い、現在も同クリニックで行われる年間3663例の手術をすべて執刀している（2022年1～12月）。

「手術室は聖域であり、最高の技術によって患者さんを治療するという絶対的な自信がない限り、メスを持つべきではない」と言う中原医師は、高い志を持って手術を行ってきた。その手術結果を学会で発信したり、手術見学を希望する医師を断らない、インターネットでも情報を公開するなど、その知識と技術の普及にも積極的に取り組んできた。

同クリニックでは全手術のうち2409件が白内障手術だ（2022年）。白内障は高齢になると誰でもかかる目の病気だが、同クリニックには50代、60代といった比較的若い層の来院も目立つという。その理由は中原医師による多焦点眼内レンズを使用した先進的な手術を受けるためだ。

「白内障治療の眼内レンズは焦点が1か所の単焦点と、複数の多焦点に大別され、単焦点は保険適用となっています。若い方はその後の長い人生を考慮して、より良い視力を確保できる多焦点を選ばれることが多いです」と中原医師は話す。

多焦点眼内レンズのデメリットを克服した新型も登場

多焦点眼内レンズは遠近の2か所に焦点が合うもの、これに中間を加えた3焦点、さらに自費診療ではあるが5焦点レンズなど、様々な種類が登場している。またも中原医師は『焦点深度拡張型レンズ』も今後は広がってくると予測する。

「多焦点眼内レンズは構造的な理由から夜間に光がにじむハロー・グレア現象が起きる人がいます。夜間の光が気にならない方であれば5焦点レンズが最も良いです。しかしながら、夜間の見え方が気になる神経質な方には『焦点深度拡張型レンズ』もむいています。この場合、遠方と中間までしか見ることができませんがそのかわり夜間の見え方が問題ありません。手元が若干見えづらいので眼鏡が必要になることもありますが、単焦点よりは広い範囲が快適に見えるので、おすすめです。また自費診療のレンズではより焦点の合う範囲が広いものもあります」（中原医師、以下同）

白内障手術では眼内レンズ選びが重要と考える中原医師は、すべての患者にオーダーシートを配布。手術後にどんな見え方を希望するか、具体的な見たい距離とその優先順位などを記入してもらう。

「運転中の風景なのか、テレビやパソコンか、見る対象によって必要な視力が異なります。当院では30センチ、40センチ、50センチ、75センチ、1メートル、2メートル、5メートル、完全遠方などから選んでいただけます。中にはお化粧するために20センチを見たいというご婦人もいました。このようにライフスタイルも含めてお話を丁寧に伺い、その方にあったレンズを提案しています。このため当院では20種類の眼内レンズを揃えています」

多焦点眼内レンズは基本的に自費診療となるため費用は高額だが、中には選定療養となり、レンズ代のみ自己負担で手術費用などは保険適用になるレンズもある。

「白内障手術は近視、遠視、老眼、そして乱視も治すことができる最後のチャンスです。お金はかかりますが、多焦点眼内レンズは非常に有効な自己投資と言えるでしょう」

なお、同クリニックでは多焦点眼内レンズを使用する白内障手術はレーザー白内障機器を使用する場合もあり、レンズを挿入する切開をレンズサイズに正確に合わせてなおかつ正円にするなど、的確さや安全性の高さも重視している。また、中原医師は切れ味がシャープなダイヤモンドメスを使用しており、レーザーと自身の手技を組み合わせた、クオリティの高い手術を追求している。

レンズの入れ替えが可能な『やり直し外来』も設置

白内障手術の眼内レンズは、一度挿入したら取り出すことができないのが普通だが、どうしても合わないという患者に対する『やり直し外来』を開設していることも同クリニックの特徴の一つだ。

眼内レンズが安定するまでかかる期間は人によって異なり、数日で済む場合もあれば数か月かかるケースもある。時間が経てば経つほど癒着して取り出しにくくなるのだが、中原医師は10年以上経過したレンズを取り出した経験もあるという。

「レンズがどうしても合わないという症例は、数百例の中で1例程度と極めてまれですが、それでも取り出せる技術を持っていることが眼科医の必須要件だと私は思います。ほかの眼科では『時間が経てば慣れる』と見放された患者さんが当院を訪れるケースも少なくありません。私は患者さんを一人も取りこぼさないことを目指し、様々な技術を身につけられるように研鑽を積んでいます」

患者の不安を取り除く笑気麻酔と「音を立てない」手術

「患者ファースト」の姿勢を大切にする中原医師は、手術中に患者が不安を感じないように細やかに工夫している。その一つが麻酔だ。白内障手術では点眼麻酔が使用されるが、同クリニックではリラックスできる笑気麻酔を併用することも少なくない。また、手術中に強い光が当たると視力障害（網膜光障害）が起きることもあるため、通常の25%程度の光で手術できる高感度の顕微鏡を導入している。

「加えて、手術中にできる限り音を出さないようにしています。術中の患者さんは私たちが思っている以上に音に敏感で、器具の音を聞くだけで緊張してしまう方もいますし、医師やスタッフの何気な発言だけでも何か起きたと想像してしまうこともあるからです。私の手術は片目で3～4分という短時間で済むのですが、それでも細心の注意を払うようにしています」

白内障や硝子体手術のほかに緑内障や黄斑変性、角膜移植など幅広い治療を実施。さらに網膜剥離などの緊急手術の要請も多い。

「緊急手術にはなるべく早く対応できるように心がけています。数時間単位で悪化してしまうことも少なくないためですが、患者さんの不安な気持ちを1秒でも早く解消してあげたいですからね」と微笑む。

確かな技術を備えて親身に患者に寄り添う中原医師。同クリニックの待合室が常に満席であることも納得できる。

手術室／レーザー白内障手術機器LensXを導入。デジタルヘッズアップサージェリー内蔵型の顕微鏡「ARTEVO800」や低眼圧で手術が行える「センチュリオン アクティブセントリー」、硝子体手術で活躍する「コンステレーション®ビジョンシステム」など先進機器を備えた手術室。

多焦点眼内レンズはレアなものまで約20種類用意している

インテンシティー Intensity

世界初の五焦点眼内レンズで、三焦点眼内レンズではカバーできなかった焦点にも強く、遠方から近方までメガネなしの生活を実現するが、難点は効果を発揮するには医師の豊富な使用経験と精度の高い技術が必要である点と自費診療で高額であること。

テクニスシナジー Tecnis Synergy

二焦点+焦点深度拡張型というレンズ選定療養の中では手元の視力も良好であるが、夜間の見え方に若干の癖があるため、費用を抑えて、近方重視で夜間あまり外出しない方におすすめ。

著書紹介

中原 将光（著）
幻冬舎メディアコンサルティング 刊

『スゴ腕サージャンが解説! 最高の白内障手術』

大事なのはQOV（Quality of Vision）＝見え方の質。眼科手術のプロが語る最先端の技術と理念。

白内障・多焦点眼内レンズ

白内障手術のポイントは眼内レンズ選び 多焦点眼内レンズで満足できる視力回復を

白内障は高齢者が多くかかる目の病気であり、治療するには手術が必要だ。その際に重要になるのが眼内レンズの選び方。現在までに眼科手術を3万件を行い、2022年に2409件の白内障手術を行っている中原将光医師は「多焦点眼内レンズなら、理想的な視力回復をめざすこともできます」と話す。白内障眼内レンズの選び方について話を伺った。

中原将光
中原眼科　院長

なかはら・まさみつ　1978年東京都生まれ。2003年浜松医科大学卒業。東京医科歯科大学病院眼科、横浜市立大学附属市民総合医療センターなどを経て、フリーランスの眼科医として手術を中心に活動。2021年4月に中原眼科を開院。日本眼科学会認定専門医。著書に『最高の白内障手術』（幻冬舎メディアコンサルティング刊）がある。

欧米の新しい多焦点眼内レンズを取り入れ満足度の高い治療を

白内障は、目の中でレンズの役割を果たす水晶体が濁ってしまい、視野がぼやけたり、目がかすむなどの症状を伴う。主な原因は加齢であるため、ほとんどの人が高齢になるとこの病気にかかると言っていい。

「白内障は老化現象の一つですから、誰でも発症します。個人差はありますが、早い方で40代前後からかかる方もおり、80歳を過ぎると程度の差はあっても、ほとんどの人がこの病気を患っています」と話すのは、東京都町田市でクリニックを開院している中原将光医師だ。中原医師はこれまで3万例を超える手術実績を残しており、大学病院や著名な眼科クリニックで執刀したほか、フリーの眼科医としても活動した後に現在の眼科を開院。1年間で366 3例（2022年1～12月）の手術を中原医師は行っており、その経験に基づき、学会やSNSで最先端の知見を発信してきた。

「近年、白内障手術は日帰り手術が一般的になり、全国的に普及しています。重要なのは、手術で使用するレンズ選びなのですが、単焦点だけでなく多焦点レンズがあることをご存じでない方もいらっしゃいます」（中原医師、以下同）

白内障手術では濁った水晶体を取り出して、その代わりに人工の眼内レンズを挿入する。眼内レンズは焦点が遠方か近方（近距離）のどちらか1つの単焦点と、遠近両方に合わせられる多焦点がある。多焦点レンズは欧米を中心に新製品が次々に開発されており、めざましく進化していると中原医師は話す。

「多焦点眼内レンズは遠近の2か所に加えて、中間も見える3焦点や、遠方と中間の間の遠中、中間と近方の間の中近という5か所にフォーカスするタイプなど、様々な種類が登場しています」

多焦点眼内レンズでも「選定療養」なら費用を抑えることが可能

単焦点眼内レンズでは、手元が見えるようにした場合は遠方が見えなくなり、遠方が見えるようにすると手元が見えなくなる。このため見えづらい距離を眼鏡やコンタクトレンズで補う必要がある。

多焦点では手元も遠方も見えるようになる。しかし、レンズの構造的な理由から、夜間に光がにじむハロー・グレア現象が起きることがある。近年はこのデメリットを解消するタイプの多焦点眼内レンズも発展してきている。

「この新しい『焦点深度拡張型レンズ』は、1か所の焦点に幅ができるレンズで、例えば遠方と中間で明瞭な視力が得られるタイプなどがあります。この場合、近方に若干弱みがありますが、白内障手術は両眼に行うのが一般的ですので、利き目の方を遠くに合わせ、もう一方を手元寄りに合わせることでこの問題を解決しています」

基本的に多焦点眼内レンズは自己負担になるため、レンズの価格は種類によって異なり、片目と両目の治療でも価格が異なる。単焦点の保険診療より高額ではある。

ただし、中には「選定療養」の対象になり、レンズ代のみ自己負担で、手術などにかかる費用は保険診療で賄えるケースもある。

「多焦点眼内レンズには乱視を矯正できるものもあります。言い換えれば、白内障手術は近視、遠視、老眼、乱視を治すことのできる最後の機会なのです。費用が許すのであればオーダーメードのレンズを、費用を抑えるのであれば選定療養対象のものを選べるよう当院でも各種の多焦点眼内レンズを揃えて、患者さんが望まれる見え方を実現できるよう、最良と思われるレンズを提案しています」（詳細は左上一覧参照）

安全で安定した手術を行うレーザー機器も普及

眼内レンズのほかにも白内障手術を行う際のポイントがある。まず、執刀医の技術力だ。白内障手術は一般的には片目で15分程度で済むため、簡単な手術と思われがちだが、目は繊細な臓器だけに、ミリ単位のテクニックが求められる。

「欧米では目の手術が一番難しいと言われています」と中原医師。「加えて、手術を成功させるためには事前の検査を行う各種の機器や、手術機器も重要」と話す。特に手術ではレーザー白内障手術機器（フェムトセカンドレーザー）が世界で主流になってきている。中原眼科でも開院半年後の2021年11月に導入した。

「白内障手術では古い水晶体を取り出すために、前嚢と呼ばれる水晶体が入っている袋の前面を眼内レンズの直径に合わせて正円で切開しなければなりません。これまでは医師の手技で行われていましたが、レーザーを使用することで人間の技量を超えた正確な円を描くことができるのです。このレーザー手術は自費診療となるが、多焦点眼内レンズの機能をいかすためにはとても重要です。逆に言えばよい技量でなければレンズの機能は発揮されません」

ちなみに、中原医師は一般的な金属ではなく、「ダイヤモンドメス」を使用しており、レーザー白内障手術機器とダイヤモンドメスの両方を使い分ける「ハイブリッド」手術を行っている。

「ダイヤモンドメスの方がレーザーよりもシャープに切れます。このため、例えば角膜切開にはメスを使うなど、部位によって使い分けています。つまり、先進の検査機器、レーザーと手技による的確な切開、『患者さんの希望するよく見える目を実現する』ためにベストマッチするレンズの選択。こうした手術が、現在、考えられる最良の白内障手術と言えるでしょう」

視力は日常生活に深く関わり、一生涯にわたって重要な機能であるだけに、医師や病院選びも慎重に行いたい。

20種類近くの眼内レンズを取り扱う中原眼科でエビデンスの多い多焦点眼内レンズ（順不同）

● インテンシティー　Intensity

世界初の五焦点眼内レンズで、三焦点眼内レンズではカバーできなかった焦点にも強く、遠方から近方までメガネなしの生活を実現するが、難点は効果を発揮するには医師の豊富な使用経験と精度の高い技術が必要である点と自費診療で高額であること。

● エボルブ　EVOLVE

ハローやグレアといった夜間の異常光視症がほぼないフルオーダーのレンズ。焦点深度拡張型ではあるが近方視力も良好という特殊なタイプ。他のレンズで対応できない高度な近視や乱視にもほとんど対応でき、ほとんどの人が適応になる。

● ミニウェル　MiniWell

ハローやグレアがほぼないレンズ。MiniWellは遠方から中間に強く、兄弟レンズのMiniWell Proxaは遠方と近方に強いため、優位眼（利目）にMiniWellを反対の眼にMiniWell Proxaを使用するFusion Visionで遠方、中間、手元までハローグレアなく見ることを可能にする。

● クラレオンパンオプテックス　Clareon PanOptix

三焦点型の多焦点眼内レンズで選定療養で費用を抑えることができる。遠方、60cm、40cmの焦点のため近方は少し弱いが広い範囲の焦点があり選定療養の中では遠方と夜間視力もよい。

● クラレオンビビティ　Clareon Vivity

選定療養対応の焦点深度拡張型レンズ、乱視に対応できないため適応は限られる。近方視力は弱いが費用を抑えて夜間に問題ないレンズを挿入したい方が適応。

● テクニスシナジー　Tecnis Synergy

二焦点＋焦点深度拡張型というレンズ選定療養の中では手元の視力も良好であるが、夜間の見え方に若干の癖があるため、費用を抑えて、近方重視で夜間あまり外出しない方におすすめ。

資料提供：中原眼科

白内障、網膜硝子体などの治療を行う先進機器

写真提供：中原眼科

『スゴ腕サージャンが解説！最高の白内障手術』
中原将光（著）
幻冬舎メディアコンサルティング 刊

最新の「白内障手術・多焦点眼内レンズ」について解説している。